

手書き目録カード一考

佐藤 勉

毎年、7月から8月の夏休みになると図書館実習生が別府市立図書館にも訪れます。

主な実習内容は「分類・目録実習」、「カウンター実習」、「館外奉仕（移動図書館）実習」、「装備・製本実習」に大別されますが、特に「分類・目録実習」および利用者と接する「カウンター実習」を重点的な実習として、別府市立図書館では指導しています。「分類・目録実習」では目録作成、特に記述式ユニットカードの作成をその中心としています。

現在、多くの図書館は電算化が進んでおり、だんだんと昔ながらの手書きをするユニットカードは姿を消しつつあります。また、カードがあってもプリントアウトされた物や、業者が作成した物を使用するものが増えてきています。また、司書課程の授業でも電算での授業は受けても、ユニットカードを作成したことが無いという、実習生も増えてきています。

確かに電算化は、事務の効率化・合理化、多くの受入図書・資料への対応、分類等の均一化・適性化、レファレンス時の迅速な対応や多くの情報が提供できる、ネットワークへの対応等々、多くの利点が見られます。これは、司書ではない図書館職員にも奉仕業務への手助けとなるものでもあります。

しかし専門職としての司書、特に郷土資料等を担当する司書に大切な図書・資料の把握には、ユニットカードを作成することが重要だと思われます。

それは、カードを作成する際、分類・書名・著者名・発行所・件名等をとるために、図書・資料を開き目を通すため、その内容や目的を知ることができます。また、それらをカードに書くことにより、理解・記憶することができます。その他にも書名・著者名や地名等、電算等に使用されているJIS漢字に無い字を、より原資料に近く正確に記載・記録できるため、その目録の正確さ確実さが保たれる上、専門職として覚えることができるのです。これら理解・記憶を駆使し、目録を併用することにより、利用者の要望により的確に素早く応えられるのではないのでしょうか。

また、利用者全員が電算の端末等の操作の理解が容易なわけではないのです。私も利用者から、「県立図書館郷土資料室で端末検索をしたが操作方法がよくわからず、カード目録で検索をした。カードの方が見やすく、わかりやすい。」といった話を特に高齢者の方から聞くことができましたし、電算の文字よりもカード、特に手書きの文字の方が暖かみがあるという話もありました。

現在はドンドン電算化が進みカードが消えつつあります。今後は電算とカード両方の目録を設置してゆく方向が望ましいのではないのでしょうか。

このような考えにより、私は実習生にも是非ともカードを作成するよう勧め、実習でも重点的に指導しています。

何でも効率化ではなく、たとえ効率的ではないと思われても、人と人が接する暖かみのある場所として公共図書館は生涯学習の最前線ではないだろうかと思えます。

(さとう つとむ 別府市立図書館)